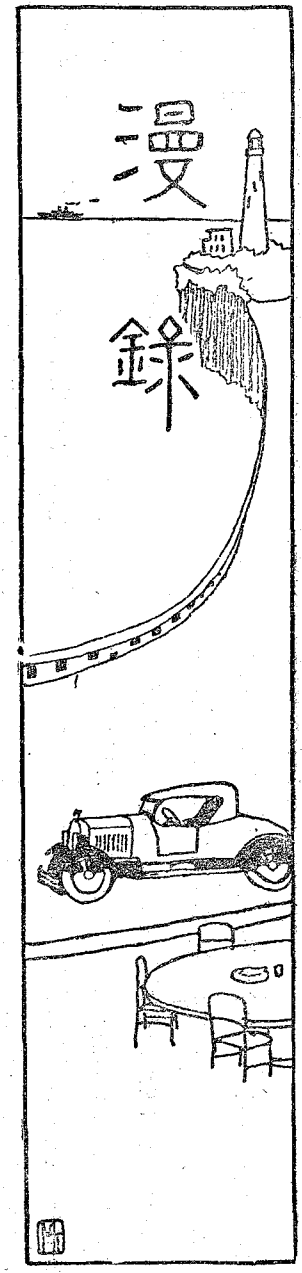


# 夜寒の窓

中道等

○

寒がりの自分には、夜寒の火桶といふ風流は絶對に適しない。葱の白根とその外漢法で用ひる二三の藥味を調へ、煎じて飲んでゐると、血行が旺んになるつもりか大に溫かになつた。人に效能を陳べて勸めて見ても、一杯で大低まゐつてしまふ。自分が甘いと思つても、飛んでもない獸芹の事實が出來上つたのであつた。

笑ひながら近松の淨瑠璃本を讀んでゐると、お夏清十郎五十年忌歌念佛の一條、お夏の狂亂に「觀音菩薩の誓ひには、枯れたる木にも花がつき、笠に挿いたは梛の葉、腰に挿いたも梛の葉、一枝二枝、三日に三枝云々」の名文句が

今更のやうに目に留つた。梛の葉は暑氣を拂ふものと信ぜられた外に、熊野へ詣でる人には、無くてはならぬ持ちものであつたらしい。腰になぎの葉を挿した俗習が、果していつ頃から起つて何時頃眠んで了つたものであらうか。熊野詣での事の序でに思ひ起すことは、梛の音と似た水葱のことであつた。近松があの絶大な才筆を以て、梛と水葱、腰と輿とを、一音萬象を融化し去つたものと見るわけにも行かぬだらうが、これから葱を煎じてこの水葱を考へるも夜寒の窓のやるせないすさびに過ぎないのである。

清女の枕の草紙に

神は松の尾八幡、この國の帝にておはしますけんこそ、いとめでたけれ、みゆきなどに、なき花の御輿に奉るなどいとめでたし云々

なきの花みこしは、歴代の評釋で言ひ盡したやうに、葱花輦といつて、鳳輦に次ぐの御輿だと云ふ。「あけぼの抄」には、ひともじの花さしたる云々とあつて、ひともじは、き、即ち葱、今のねぎと訓じて居るものだとある。然るに先日故人となられた大槻文彦氏は、水葱はみづあふひの類古へ植ゑつくりて食せり、又その葉の細きを小水葱といふ、春花咲く、紫にして美なり、と言海には書かれた。天皇神事の御幸には、御輿に花を挿すこと古例と言はれるから、單にその形容の上からいつたものか、又實際に花をかざしたものか。「增鏡　後嵯峨上皇の熊野にみゆきある時に辨の内侍

をりかざすなきの葉風のかしこさに、光りみちぬる小車のあと

と詠じたのはやはり梛の葉か、或は水葱か、又兩方かけてなきの花のみこしに梛の葉風と言つたものか、たとへば水葱にしても、今の世のねぎと訓ずるものとは同種でないことと明かである。

日本書紀、天智天皇近江の宮に崩れ給ひ新宮に殯りした時の童謠に

みよしぬの、よしぬのあゆ、あゆこそは、くまへも、ゆきえぐるしゐ、なぎのもと、あればくるしゐ。

この「奈疑能母騰」卽ちなぎのもとゝあるから、芹なゞと同じやうに、水田に耕作したものであつたことを知る事が出來る。萬葉集三、

春がすみ春日の里にうゑこなき、苗ありといひし柄はさしにけん

同、一三

かみつけぬ伊可保のぬまにうゑこなき、かくこひんとやたにもとめけん

田ばかりではなく、沼にも植ゑたことあるから、いよ〳〵以て水草だと分る。此の水葱はよく食はれたと見えて、和名抄に奈木とあり、淸音に訓じて居る。書記に奈疑と獨つてよませた。漢名兩休花、又藪、又薤とあり、薤は本草に早く水旁に生ず葉、澤瀉に似て小、また蒸して喰ふに堪ゆと云々。延喜內膳式には供奉雜菜、水葱四把、四升に准ず、五六七八月漬年料の雜菜、水葱十石料鹽七升、右秋葉を漬る料、田六反二百三十四步、種芹水葱の料乙訓郡にありと見えて居る。又別に小水葱のこともあつて、同じく內膳式に漬年料雜菜、糟漬小水葱一石料鹽一斗二升汁酒五斗と見える。して見ると、煮たり茹でたり、漬けたりして食ひ小水芹の方は又糟につけたらしいから、當時上下の食ひ膳には、芹と同じやうに無くてはならぬものであつたらう。どつちも田や沼にうゑたものらしいが、種類が違ふものか、自分には解らない。萬葉集に「苗代のこなきが花を衣にすり」などゝ詠まれた。思ふに藪の方が水葱で、薤の方が小奈木かも知れぬ。知つてる方の高敎を得たいと思ふ。

昔は京の近邊に、多く水葱を栽培して食用にしたらしいことは、今日のねぎと同樣であつた。たとへば有名な萬葉の歌、われにな見せそなきのあつもの、を始め、宇治拾遺物語の、澤山のなきを食つた話なども、證據とすべきものであつて、三町ばかりも植ゑた水葱を、悉く食つてから、更に白米一石だかり飯にして與へ、皆食はれてしまつた話、人の目には見えぬ餓鬼、畜生、虎狼、犬鳥などつきて、とあさましくも歎じたなどは、卽ちこの水草の、曾て大に食用せられたことを語るものであつた。しかしその水

葱や、小なきの、果してどういふものであつたかは、自分には分らない。又どうして一方の芹が昔のまゝに殘存して居るのに引きかへて、これのみが失せたのも、全く不明である。恐らくもつと文獻を探せば或はやゝ確的なことが分明するかも知れぬが、ふと思ひついたことのみの記念に過ぎぬ。單に葱の香に引かれたばかりである。

○

柳里恭の「獨寐」を見てゐると、あの遍照金剛といはれた大師の、不思議な所業をなしつゝ諸國を巡つた姿が、今更のやうに興味深く目の前には現れて來た。たとへば大師行脚の途上、空腹甚しくして一軒の茶店に腰を下す、ふと見ると婆がうまさうな饅頭を蒸かしてゐる。どうだらう一つ惠んで呉れないかと賴んだが、意地の惡い婆と見えて普通の道心坊扱ひにしてどうしても呉れぬ。大師恨んで涎を流しながら立ち去ると、其の饅頭悉く石に化した。恨んだばかりでなく、もし石に化つて了へと呪つたなら、弘法の名にも似合はぬ所業であつて、ちと割の合はぬ話であるが故高木敏雄氏の「日本傳說集」などを見ると、不思議にもこの話が、まんぢうのみならず、山芋にまで及んで遂に石芋傳說の名の下に、諸國に擴がつて居るのであつた。

陸奥の八甲田の麓の、東津輕の高田村に、字豆ノ坂といふ坂みちがあつて、こゝにも饅頭石が轉がつてゐる。こゝは弘法大師ではなくて、面白い事には木曾義仲の娘といふことであつた。卽ち旭將軍の娘、粟津の一戰で殺された父の仇を報ぜんとて、遙々下つてこの坂へ來り、茶店へ休む敵方の者に件のまんぢうを賣り、中に毒を仕込んで大に命を奪つてやらうとしたが、人に見られて果さず、遂に捕へられて殺された。娘の怨念であとに殘つた饅頭が皆石になつたと云ふのである。

義仲の娘を東津輕まで運んだのは、恰も西津輕の牛潟といふ沼に、平親王將門の娘の瀧夜叉を引つぱつて來たと同樣に、羽なくして飛ぶ說話の往々人の意表外に出づることを示すものである。この東津輕のまんぢうの石は、隨分拾

つて歸る人もあるといふが、何にするかはついうつかりして聞きもらしたが、諸國では之を孕石と唱へて產婦の安寧を守る石として使用したものであつた。振ると中の餡がガラガラと鳴ること、丁度腹中に子のある形と似て居るから來た古い民俗であつたらしい。「日本傳說叢書」伊豆の卷、賀茂郡田子村平野山麓にある石などば、至つて大きいもので、高さ二丈、周り七八尺許り、出產の祈禱をすると效驗あると信ぜられたが、今は畑中に轉がつてゐると云ふ。卽ち生石傳說であつて、津輕の外ヶ濱、舍利石といふ美しい小石が、沖の舍利母石から生れて來ると「眞澄遊覽記」にあるものも、石が又子を產む話の一例で、伊豆の大石も、昔なら小石からかくも成長したものと言はれたかも知れぬ。

德川家康幼年の頃、駿河に人質となつた時、ひどく侮辱された復讐として、後年高天神落城の砌、孕石主水に切腹させたと、「類聚名物考」の附錄三に三河記を引いて書いた。古くからこの名に注意して孕石といふ地名も人名も生じたことであらうと思ふ。昔から本草家や、庭石を好む連中は、禹餘糧、太乙餘糧などゝいひ（重訂本草啓蒙六）又スヾイシ、コモチイシ、イハツボ、フクロイシ、タルイシ、ツボイシなどゝも唱へた。支那の會稽山に多いと云ふ石も、夏の禹王が、石の細粉、まんぢゆうなら韜に當るところを、諸候を饗した餘りが化したのだと、本草綱目などに書いたのは、日本の弘法談を、大に明るくしたものに過ぎぬ。「抱朴子」や「神農本經」になると、仙藥として取り扱はれ、久しく服すれば寒暑に耐え、且つ身を輕くして千里を飛行す抔といふから、自分の如き懶け者は、一つ呑んで見ようかなどゝいふ野心も、起らぬでもない。

本草綱目ではやはり此の石を產婦に藥效ありとした。支那でも子持石と稱したことは證據がある。群國志に曰く、乞子石在二馬湖南岸一東石腹中出二一小石一、西石腹中懷二一小石一、故楚人乞二子於此一有レ驗、と「淵鑑類函」二十六には見えた。

西洋では古くから鷲の巢から發見するので、鷲石と唱へられたこと、師友南方熊楠氏の考證に詳しく見えてゐる。

（鷙石考）元來動物が特殊な石を以て其の産や生育を助けるといふのは、東西ともにかなり昔から信ぜられた民間の慣俗であつた。たとへば養られた卵を、藥石を以て暖めへかへした鶴の話がすでに張華の「博物志」にも戴つて居り、又朝鮮人參を用ひた鶴が「善道寺道名所圖會」にもあり。同じ話が「甲子夜話」十七にもあつて、老松の軒近く藪ふ古い家で、この梢の鶴が曾てさうであつたといはれても、もう何の疑心を抱かぬ迄になつて居るのである。

西洋でこの石を安産の外に盗人探索にも用ひて効ありとしたのはごういふ譯か、例の中空にして中に効あること、恰も盗人の懐中に賍物ありと見たのかも知れぬ。この外に又癲癇病を治す藥石たとも云ふ。かうなると、溫泉と同樣何にでも利くかも知れない。が、やはり久しく服して仙人になる方が一段と氣樂な話といつてよいやうである。

# 西都に去つた高田景君

田中生

復興局の横濱出張所長高田景君が、京都市の土木局長と爲るので這般退官した、君はわが路政界の功勞者として常に我々の敬服する人であつて、其の退官を惜むのであるが、是も萎靡振はない京都市路政改革の爲なら忍ぶより外ないであらう。

君は男性的の快男兒であるのに、あの女性的な京都に餘程因緣の深い男だ、明治四十一年に京大理工科を出て、京都府土木工師、次で京都府技師と爲つてゐること十年に及